

【雲山浩渺】

須永文庫所蔵の「古筠（金）先生詩書卷」は、金玉均が小笠原の父島に滞在していた頃に書いたもので、揮毫の見本として須永に送ったものとも言われます。実際、冒頭の「雲山浩渺」は、同じ文言で字もよく似た書が東京在住の個人宅に伝えられ、120年以上を経た2012年、韓国側に寄贈されました。

同年4月4日の「聯合ニュース」のサイトによりますと、寄贈されたのは甲申政変に失敗して日本に亡命した時の金玉均の気持ちを書いたもので、史料としての価値が高いとしています。

『全訳 漢辞海 第四版』（三省堂、2017）によると「浩渺」とは、「広々とはるかなさま」という意味で、「聯合ニュース」の記事には当時の金玉均の気持ちを表現したものとあります。

金玉均が日本に逃れた際、仁川で乗った日本行きの船の船員に書いたということです。ちなみに仁川で乗った船は「千年丸」または「千歳丸」と言われ、船長の辻覚三郎は、金玉均ら亡命者の引き渡しを求める朝鮮政府の要求に抗し、金玉均らを保護したと伝えられています。須永の日記は明治21年10月13日付で辻覚三郎の訃報を伝えています。

【知我者】

続いて次のように書かれています。

「小笠原島夏日、為試病腕、寄贈知我者」

金玉均は小笠原ではリウマチに苦しんだので「病腕」としたのでしょうか。「知我者」は『詩経』にある言葉ですが、詩経では「謂我心憂」と続きます。憂える自分の心情を知る須永に贈るという含みでしょうか。

政府から日本立ち退きを求められ、応じなかったため強制的に小笠原島に隔離された金玉均の心境に合う文言です。

須永の日記明治21年4月22日付には、小笠原にいる金玉均を見舞った柳赫魯からの報告として「胃病ローマチス未癒、加之罹疝氣病。時候、追日向夏季、受蟻・ランプ虫等襲撃、頗極衰弱、顔色憔悴、形容枯槁（ママ）」とあります。ローマチスはリウマチのことです。胃病、疝気などに加え、蟻や小笠原に多いランプ虫に苦しめられていました。ランプ虫は灯火に集まるカミキリに似た甲虫の俗称ですが、金玉均を悩ませたランプ虫はオガサワラハイイロカミキリモドキとみられ、分泌する液に触れると皮膚に水ぶくれが出来るそうです。

【古鏡銘文】

次に「朱鳥玄武順陰陽、子孫備具居中央」とあります。

古代中国の漢、新の鏡の銘文によく見られる七言句で、「陽」と「央」が韻を踏んでいます。

「順」は「ととのえる」という意味もあり、岡村秀典さんの『鏡が語る古代史』（岩波書店、2017）では、大阪府紫金山古墳出土の方格規矩四神鏡、岐阜県城塚古墳出土と伝える獣帯鏡（五島美術館蔵）にある同じ文言を「朱鳥と玄武は陰陽を順（ととの）う。子孫備具し、中央に居らん」と読んでいます。

方格規矩四神鏡には青龍、白虎、朱鳥（朱雀、朱爵とも）、玄武の四神があしらわれるので、元の銘文には龍と虎も出てきた可能性があります。岡村さんの前掲書によると、紫金山古墳出土鏡、城塚古墳出土鏡とも「左龍と右虎は不祥を辟（しりぞ）く」という文言が彫られています。当時広まった陰陽五行思想を反映しているようです。

なお、「居」の字は「尸」の向きが通常と逆になっています。書に詳しい方に教えていただければ幸いです。金玉均が何を見て書いたのかが分かるかも知れません。うっかりミスで図像が逆向きに彫られることはあっても、字が逆になることは珍しいように思います。

「詩書卷」の他の作品については別の機会に触れたいと思います。

【注釈追加】

さらに日記に戻り、前回に続き注釈を2人追加します。

明治21年6月9日 【池上日高】 日蓮宗僧侶。栃木県の教導職試補らが明治七年六月、神祇官再興を求めて左院に出した建白書（国立公文書館所蔵「復神祇官之議（栃木県管下教導職試補為郷了悟、服部珉随池上日高等二十四名）」によれば、池上は同月時点で須永の家に近い妙音寺の住職教導職試補だった。年齢は「三十七年七ヶ月」という。

明治21年4月21日 【千家尊福】（1845～1918） 神道家、政治家。出雲国造家の出身で明治初期に神道教導職の中心的役割を担い、出雲大社の教化活動も進めた。政界でも活動し、貴族院議員や司法大臣などを務めた。【参考文献：『明治時代史大辞典2』（吉川弘文館）、二〇一二】

【余談】

昨年、一昨年と韓国の調査団が佐野市郷土博物館に来館しました。近年、韓国でも須永文庫に対する関心が高まり、昨年は移動日を含め9日間の日程で佐野を訪れました。

筆者も見学する機会をいただいたのですが、休憩時間の雑談で、当地の名物である佐野ラーメンが話題になりました。韓国でも有名なのか、皆さん、食べることを楽しみにしていたそうです。

韓国語で佐野ラーメンは「サノラミョン」と言います。韓国の方はこの言葉を聞くと胸に迫るものがあるということでした。なぜなら同じ発音のタイトルの有名な歌があるからです。ちなみに「サノラミョン」は、文脈にもよるでしょうが、筆者の手元の辞典には「生きていたら」という訳が出ていました。

ハングルでは

사노라면

と書きます。

ネットで検索すれば聞けるので興味を持たれたら聞いてみてください。

ちなみに作曲したのは日本でも活躍した吉屋潤だと言われています。吉屋潤はキム・ヨンジャさんがソウル五輪で歌った「朝の国から」やパティエ・キムさんのヒット曲「離別（イビョル）」を作曲しています。二曲ともNHKの紅白歌合戦で歌われたことがあるので、聞き覚えのある人も多いと思います。

★なお、史料の読み等は今後も含め筆者個人の判断によるもので、違う読み方を排除するものではありません。

2024年3月1日 広沢有久